

眞実の救い

宗正元



目 次

一、「まこと」とは.....	1
二、すでに道あり.....	8
三、「本当に生きているのか」.....	13
四、本願成就.....	19
五、「罪」深し.....	27
六、私たちの大地.....	32
七、無量のいのち.....	37

一、「まこと」とは

本当に久しぶりにご縁をいただきまして、この高倉会館にまいりました。「真実の救い」という講題にさせていただきましたのは、私自身が「救い」ということがなかなかわからなくて、たまたま親鸞聖人の教えに回り合うことをとおして、はじめて今まで私自身が考えておりました「救い」というものが、とんでもないことを考えていたのだなあ、というようにことに気づかされたということがございますので、改めてそのことをもうひとつ掘り下げていく意味で、「真実の救い」ということについて今日考えさせられておりますことをお話し上げたいと思つたわけでございます。

親鸞聖人の教えに出遇うまでに私が考えておりました「救い」というものは、苦しみとか悩みを解決するというようなことでした。たとえば、災害などが起こりますと救援活動をするとか、あるいは何か病氣やけがなどした人を助ける場合に救護するというような、そういう困った人を助けるとかですね、あるいは悩んでいる人の病氣の悩みや生活のうえにいろいろ出てまいります人間関係の悩みごととかですね、さまざまそういう悩みを解決するということです。

また、最近癒すということが流行っておりますが、私のこころや体を癒すと言いますか、何かそういうことが宗教なんだと言って取り上げられておりますけれども……。そういうことが私も「救い」なんだとすっかり思い込んでいたのですが、たまたま親鸞聖人の教えに回り合つて、ある意味では驚きでも

あったのですが、はじめから領けたというものではなくて、「そんなことがあるんだらうか？」というようなことが「救い」でありました。

これは『歎異抄』の中に出ております親鸞聖人のお言葉で申しますと、終わりの方にですね、聖人がつねつね仰せになっておられたといつて二つの言葉が取り上げられております。その後の方ですけども、そこに、

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもつて、それごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします

〔後序〕 真宗聖典 640～641頁

こういうふうに親鸞聖人がつねに仰せられていたと、唯円房が『歎異抄』に書き記しておられます。